B1 レベルの対話能力養成のためのストラテジー指導

－『まるごと中級（B1）』の開発と試用をめぐって－

藤長　かおる（国際交流基金日本語国際センター）
斎藤　誠　　（国際交流基金パリ日本文化会館）

要旨

Common　European Framework for Reference of Languages （以下、CEFR ）B1 レベルは、「自立した言語使用者」として日常的な場面でさまざまな課題に日本語を使って対処できるレベルである。そのためには、自分の限られた言語のレパートリーを最大限に活用し、受容的な活動においても、産出的な活動においても、やりとり的な活動においても、ストラテジーを効果的に使用することが重要になると考える。本稿では、国際交流基金が「JF 日本語教育スタンダード」（(国際交流基金 2010　以下、JFS）に基づいて開発中の日本語教材『まるごと日本のことばと文化　中級（B1）』(以下、『まるごと中級（B1）』）を例として、海外の成人日本語学習者が B1 レベルの課題遂行ができるようになるための学習デザインと、そこに、どうストラテジー指導を取り入れるかを述べる。さらには、本教材の試用版を用いたパリ日本文化会館（以下、MCJP）での実践例を報告し、今後の可能性について考えたい。

【キーワード】　CEFR B1、JF Can-do、ストラテジー、聞き手、話し手

1　B1 レベルに必要な対話能力とストラテジー

1.1　B1 レベルの特徴

CEFR のレベル記述から B1 レベルの特徴を見ておく。

> ・仕事、学校、娯楽で普段出合うような身近な話題について、標準的な話し方であれば主要点を理解できる。
> ・その言葉が話されている地域を旅行しているときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。
> ・身近で個人的にも関心のある話題について、単純な方法で結びつけられた、脈絡のあるテクストを作ることができる。経験、出来事、夢、希望、野心を説明し、意見や計画の理由、説明を短く述べることができる。
>
> ＜CEFR 共通参照レベル：全体的な尺度（吉島茂、大橋理枝訳）＞

B1 レベルとは、日常的な言語活動であれば、日本語を使って大抵のことができるレベルである。母語話者との対話に参加して、聞き手として自分にとって必要な情報を理解したり、話し手として情報や意志を伝達したりすることもできる。そして、「標準な話し方であれば」という条件があるものの、想定されている言語活動は、教科書用、学習者用に過度にコントロールされたものではなく、オーセンティックなものであるという点に注目する必要がある。

1.2　B1 レベルの対話を支えるストラテジー

ストラテジーとは、CEFR では「方略 Can-do」として位置づけられる。方略 Can-do は CEFR の言語活動のカテゴリーに合わせて、「受容」：意図を推測する、「産出」：表現方法を考える、（表現できないことを）他の方法で補う、自分の発話をモニターする、「やりとり」：発言権を取る、議論の展開に協力する、説明を求める、の 3 種類に大別される。CEFR を参照枠とした JFS では、「方略 Can-do」の概念を図 1 のように「受容・産出・やりとりの枝の付け根にある Can-do で、言語活動を効果的に行うために言語能力をどのように活用したらよいか」を例示したものと定義している（国際交流基金 2010：11）が、「効果的に行うために」という点が重要である。

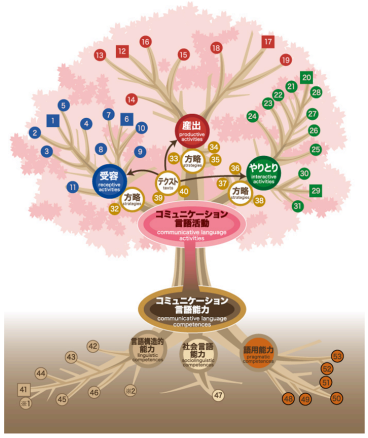


図 1.　JF スタンダードの木
（国際交流基金 2010：3）

CEFR では「やりとり」の「説明を求める」ストラテジーは、以下のように例示される。

- 相手の発話を正しく理解したかどうかを確認するための質問ができ、曖昧な点の説明を求めることができる（B2）
- 誰かが言ったことの意味を明らかにするよう詳しい説明を人に求めることができる（B1）
- 分からないときは、繰り返してもらうよう簡単に頼むことができる（A2.2）
- 手持ちの表現を使って、理解できていないキーワードや表現の意味を求めることができる（A2.1）
- 理解できないということができる（A1）

言語活動の幅が広がってくるのに応じて、ストラテジーの面でも「すみません、わかりません」（A1）などの単純なものではなく、「たとえば、それはどういうことですか」（B1）のような表現を使ってより積極的に話し手に働きかけていくことが必要になる。とくに「基礎段階の言語使用者」（Basic User）から「自立した言語使用者」（Independent User）に入ったばかりの B1 レベルでは、言語活動を効果的に行うためにストラテジーを上手に使用することが必要だと考える。

2　『まるごと中級（B1）』における学習デザインとストラテジー

2.1　課題遂行からの学習項目の抽出

『まるごと　日本のことばと文化』（以下、『まるごと』）は国際交流基金が海外の成人学習者を対象として開発中の日本語教材シリーズで、JFS に準拠し、課題遂行と異文化理解を重視し相互理解の促進を目指したコースブックである。日本語での具体的な言語活動を例示した JF Can-do を教材開発の出発点として、学習過程をデザインしていることが特徴である。

『まるごと中級（B1）』の開発でも、まず海外の日本語使用者がどんなとき、どんな場面で日本語を使うのかを探ること[1]、すなわち、実体のある言語使用場面を出発点とし、B1 レベル相当と判断したものを JF Can-do として記述した。次に、様々な JF Can-do を精査しながら、トピック別に 5 技能（聴解、会話、長く話す、読む、書く）に整理した。その上で、各 JF Can-do の実現形となる言語活動のテキストを収集・選択し、モデルテキストを執筆した。そして、これらのモデルテキストに含まれる言語能力の側面を整理し、語彙や文法、発音、テキスト構造、社会言語的な配慮などを抽出して学習項目としたが、その際、ストラテジー

についても同様に扱った。つまり、学習項目とは「課題を達成に必要なもの」であって、それ自体が学習目標にはならない。よって、最初に B1 レベルのストラテジーのリストを作成し、その全てをモデルテキストに入れ込むのではなく、JF Can-do の実現に関係のあるストラテジーを、前述の CEFR の「方略 Can-do」の例示的記述を参照しながら選んでいった。

2.2 『まるごと中級（B1)』の特徴と構成

このようにして開発された『まるごと中級（B1)』は、海外で実際にありそうな日本語使用場面と課題を選び、できるだけオーセンティックな素材を使用し、語彙や表現の過度のコントロールを避けている[2]。また、課題遂行に必要なストラテジー能力と、課題が達成できればわからないものがあっても気にしない態度を養成することを重視している。学習過程においては、インプットからの学習者の気づきやモニターを重視し、語彙や文法などの言語能力の学習を文脈化して行うこと、異文化理解につがなる素材やタスクを取り入れていくことに配慮している。

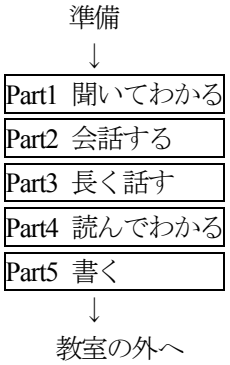


図 2. 各トピックの構成

「中級1」「中級2」の2冊構成で[3]、それぞれが9トピックから成る。各トピックは、Part1からPart5までの5技能に分かれ、それぞれのPartがひとつのJF Can-doを到達目標としている（図2参照）。この中で、主に対話能力の養成にかかわるのはPart1とPart2である。

2.3 「中級1」のストラテジー

Part 1「聞いてわかる」の目標は、実際の場面で、聞き手の立場を明確化した目的の持った聞き取りができるようになることである。「聞き手」とは受け身的な存在ではなく、必要な情報を把握するために「話し手」やテキストの内容に働きかけていく能動的な存在である。そのための「聞くためのストラテジー」として、会話のような対面型の聴解活動では**質問、聞き返し、確認、相づち・コメント**などを、アナウンスやテレビ視聴のような一方的な聴解活動では**推測、予測**などを、各トピックの学習項目としている（表 1 参照）。学習過程は「スキーマ活性化のための言語行動の振り返り→内容理解（到達目標となるJF Can-doの実現）→ストラテジーの練習→要約（言語形式に注目）」の順になっているが、前述のように、JF Can-doの実現とストラテジー練習を関係づけて行うように配慮している。

質問	わからないことを質問する（T1）
聞き返し	わからないことを繰り返して聞き返す（T2） 言葉の一部を繰り返して聞き返す（T3）
確認	言葉の意味を確認しながら聞く（T6） わかったことを確認しながらきく（T7）
相づち	話に参加していることを示す（T8）
推測	映像や写真から言葉の意味を考える（T4） 文脈から言葉の意味を推測する（T9）
予測	話しの展開を予測する（T5）

表 1.「聞くためのストラテジー」

PART 2 「会話する」では、海外の日本語学習者が現地で遭遇しうる接触場面での課題遂行において、より効果的な「話し手」となることを目指している。学習過程は「モデル会話によるインプット→大まかな内容理解→会話に含まれている形式の気づき→言語項目の練習→会話の談話構造の意識化→ロールプレイ（到達目標となるJF Can-do）」の順になっているが、言語項目の練習とともに、**言い換え、説明、反応、前置き**などの「話すためのストラテジー」の練習を取り入れている。

3　ストラテジー指導の実際　：パリ日本文化会館での試用から

3.1　MCJP 日本語講座及び B1-1 コースの概要

MCJP の JF 日本語講座（以下、講座）は『まるごと』シリーズを主教材にした中学生以上の一般成人向けの講座で、2012 年 9 月に入門（A1）コースを開始した。2015 年 4 月現在、A1（入門）、A2-1（初級 1）、A2-2（初級 2）、A2/B1（初中級）、B1-1（中級 1）の 5 レベル 24 クラスが開講され、1 クラスの最大人数は 15 人、全体で約 200 名の受講生が在籍している。

『まるごと中級 1 （B1）』（試用版）を主教材とする B1-1 クラス[4]は、週 1 回 120 分の授業で、1 学期 11 回、4 学期（計 88 時間[5]）かけて修了する。2015 年 1 月に 1 クラス、同年 4 月に 1 クラス、それぞれ新規クラスが開講した。2015 年 4 月現在、①1 月開講の継続クラスに 5 名、②4 月の新規開講クラスに 8 名が在籍している。本稿のためのフィードバックには、①②の各クラスから 3 名ずつ、計 6 名の協力を得た[6]。

3.2　授業の実際とストラテジー指導の工夫

3.2.1　「聞くためのストラテジー」の指導例

トピック 1「はじめての人と」Part1「聞いてわかる」では、日本人との交流サークルで、参加者が順番に自己紹介をする場面が設定されている。到達目標となる Can-do は「まとまりのある自己紹介を聞いて、プロフィール、興味を持っていること、希望や抱負など、大切な点が理解できる」ことで、「聞くためのストラテジー」では、自己紹介を聞いたあとで「わからない言葉の意味を質問する」方法に注目させている。

(1) 赤字（筆者注：本稿ではゴシック体）のことばの意味がよくわからないとき、どう質問しましたか。もう一度聞きましょう。音声

*山下：…性格はわりと**社交的**だと思います。*

A　：あのう、ちょっとわからなかったんですけど、性格は…（何といいましたか）。

山下：性格は「しゃこうてき」、えっと、いろいろな人と話すのが好きです。

A　：あ、わかりました。ありがとうございます。

(2) ●●のことばがよくわからないとき、どう質問しますか。（　　）に書きましょう。音声

木村：…大学 3 年生なんですが、今はこっちの●●で勉強してます。…

A　：すみません、ちょっとわからなかったんですが、（　　）で勉強していますか。

木村：語学学校。英語の学校です。

木村：ああ、そうなんですか。わかりました。

(3) ③沢田さん、④松田さんの話を聞いて (2) のようにわからないところを質問してみましょう。

(1) は聴解テキストに含まれるストラテジー使用箇所を聞かせて、ストラテジーに気づかせるのが目的である。その後、(1) の例を参考に (2) で練習し、(3) で他の人の自己紹介音声を聞き、学習者が自由に質問する構成となっている。

このストラテジーの学習前、学習者の聞き返し方は「すみません？」「え？」など単純なものが多かったが、学習後、「すみません、ちょっとわからなかったんですが、何と言ったんですか？」など学習したことを使ってわからない言葉を聞いている人が見られた。

わからない言葉を聞き返したり質問したりするといった言語活動は、初級のうちからも行われていることであり、学習者にとって退屈な活動になるのではという危惧が教師側にあった。しかし、実際に授業で扱ってみると、中級段階に入った学習者であっても、ストラテジ

ーを明示化されることにより、日本語らしく自然な聞き返しを習得することがわかった。

トピック 4，5，9 では、推測や予測に関するストラテジーを学習する。トピック 4「温泉へ行こう」 Part1 の Can-do は「テレビや旅行番組の現地中継レポートを聞いて、温泉や旅館の特徴や魅力が理解できる」で、画像を手掛かりに言葉の意味を推測するタスクがある。

(1) レポーターの話の中に、わからないことば（「ピーという音」）がありました。下の写真（テレビの画面）を見ながら温泉の紹介を聞いて、そのことばの意味を考えましょう。音声

	①	②	③	④
画面（がめん）				
意味（いみ）				

＜音声スクリプト[7]＞

①冬の寒い日には、猿が人間用露天風呂に入りに来ることもあるそうです。運がよければお猿さんと●●●できるかもしれません。

②もう、すごい眺めです。そして運がよければ、なんと、お風呂に入りながら●●●が見られるんだそうです。

推測には、視覚的な情報だけでなく文脈からの推測も必要と思われるが、学習者を見ると個人差が大きく、文脈の把握や大意の聞き取りに慣れていない人には、未知語の推測は難しいようだった。また、トピックの内容が学習者に親しみがあるかどうかも、背景知識を使った推測に関係する。練習では、ひとつのストラテジーだけに焦点が当てられているが、まずは学習者が興味のありそうなトピックで、前後の文脈を手掛かりに推測する練習をする、他のストラテジーも取り入れるなど、指導上の工夫が必要だということがわかった。

3.2.2 「話すためのストラテジー」の指導例

トピック 1Part2「会話する」の Can-do は、「知らない人に話しかけて、相手のことについて質問したり、自分のことについてくわしく話したりすることができる」で、そのために「はじめての人に話しかける」ストラテジーが紹介されている。

(1) 38 ページの会話のスクリプトを見てください。キャシーさんは、西山さんに話しかけるとき、はじめに何と言いましたか。

キャシー：あのう、失礼ですが…日本の方ですか？

西山　　：あ、はい、そうですけど。

(2) ほかの言い方も聞いてみましょう。

あのう、すみません、以前どこかで会いませんでしたか？

学習者側から積極的に会話を切り出す活動は、『まるごと』A1、A2 レベルのではほとんどなかったので、「これが知りたかった」「役に立つ」という声が学習者から多数聞かれた。授業では、様々な場面で日本人にどのように話しかけたことがあるか、またどういう言葉をかけたらいいのかについて学習者からアイデアを出してもらい、授業が活性化した。また、最終目標となる初対面場面のロールプレイでも、このストラテジーを工夫して使用していた。

3.3 試用結果からの考察

学習者からのフィードバックによると、受講前からストラテジーの存在について知ってい

たり使用していたりする人も半数以上いることがわかった。一方、ほぼ全員が『まるごと』のストラテジー学習は「役に立つ」と答えており、特に「聞くためのストラテジー」の評価が高く、「聞きわけができるようになってきた」「つい使っているときがある」といった肯定的な意見が見られた。他方、「語彙が特殊で学習が難しい」「興味のないトピックは難しい」という意見もあり、ストラテジーだけでは切り抜けられない面もあることがわかった。

このような学習者の反応に対して、教師は学習意欲を維持させる工夫をすることが大切であろう。日々の言語活動では多様なストラテジーを駆使して課題遂行しているが、『まるごと』で提示されている場面でのストラテジー学習が、実際の場面につながっていることを学習者に意識化させることが教室活動で重要だと思われる。

その意味では、教師がストラテジーに関する知識や経験を有していることが必要である。また、教科書の練習構成上、ストラテジー練習が聴解や会話などのメインタスクから抜き出す形で設定されているが、クラス活動においてはここだけを取り上げて指導するのではなく、聴解や会話などのタスクの中に上手く組み込んで練習させることが大切だろう。

4　今後の課題

海外の日本語学習者にとって、意味のある言語活動を考えることから『まるごと中級（B1）』の開発は始まった。言語能力を膨らませるだけでなく、それを効果的に使えるストラテジーを身につけ積極的に言語活動に参加する言語使用者を育てることが目標である。そのための素材やプロセスを提供するのが教材の役割だが、実は、学習過程とは単純で画一的なものではなく、教室での学習も学習者と教師が協力しながら作り上げていくものである。では、そこで使われる教材はどうあるべきなのか。試用を踏まえ、教師の体験、学習者の声を共有することを通して、試用版の『まるごと中級（B1）』を改善していくことが課題である。

[1] 国際交流基金の海外センターの日本語講座の学習者を対象にアンケート調査を実施した。
[2] ら抜き言葉、「すごいうれしい」など。また、読解素材には難しい漢字にもルビをふっていない。
[3] 「中級 1」（試用版）のトピック 1〜5 は 2014 年 9 月に、トピック 6〜9 は同年 12 月完成した。「中級 2」（試用版）は 2016 年 3 月に完成予定である。
[4] B1-1 コースはうめ・さくらコースの 2 コースがあり、うめコースでは偶数トピック（2〜8）を学習し、さくらコースでは奇数トピック（3〜9）を学習する。トピック 1 は、うめコースで前半の Part1-3、さくらコースで後半の Part4-5 を学習する。
[5] 「テストとふりかえり」（計 4 時間）を含む。
[6] 2015 年 4 月開講の講座終了時、①はトピック 1，2，4，6　②はトピック 1，2，4 を学習した。
[7] ③④のスクリプトは省略。教室活動ではスクリプトを見せずに行う。

＜参考文献＞

Council of Europe、吉島茂・大橋理枝訳・編（2008）『外国語教育Ⅱ―外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠―』初版第 2 刷、朝日出版社（原著 Common European Framework for Reference of Languages: Learning, teaching, assessment.3rd, John Trim, Brian North, Daniel Coste, 2002, Cambridge University Press.）
国際交流基金（2009）『JF 日本語教育スタンダード試行版』国際交流基金.
国際交流基金（2010）『JF 日本語教育スタンダードガイドブック』